様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月　 ５ 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ１６７２５

研究課題名（和文）ハプスブルク家の霊廟と墓碑――ゴシックからルネサンスへの変遷

研究課題名（英文）The Tombs and the Mausoleums of Habsburg: Transition from Gothic to Renaissance

研究代表者
岩谷　秋美（Iwaya, Akimi）

東京藝術大学・大学院美術研究科・大学院専門研究員

研究者番号：１０７３５５４１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、後期ゴシック建築であるウィーンのシュテファン大聖堂と、そこに配されたハプスブルク家の皇帝フリードリヒ三世の墓碑に注目し、墓碑と霊廟の関係性、および、それらが有した機能や役割について再解釈を試みた。研究に際しては、オーストリアやドイツ、フランス、スペインなどにおけるハプスブルク家に所縁のある墓や霊廟の調査を実施したほか、彫刻と建築の関係性や受容などを考察するための手がかりとして、祭壇彫刻や祈祷書なども視野に入れた。以上の調査を踏まえ、ハプスブルク家の霊廟としてのシュテファン大聖堂の位置づけを再検討するとともに、フリードリヒ三世墓碑の制作から設置までの経緯について検証した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究では、後期ゴシックから初期ルネサンスへの過渡期に当たる、ハプスブルク家の二人の皇帝の墓碑に注目した。すなわちフリードリヒ三世と、その息子マクシミリアン一世の墓碑である。前者は伝統を踏まえた多彩なモティーフを通じて墓主の功績を称え、死後の安寧を祈るものである。一方後者は伝統的な家系図をダイナミックに発展させた壮大なモニュメントである。両者の葬礼芸術における特質の違いを示したことは、殊にドイツ美術研究にて懸案たる移行期の問題を解明する上でも、有意義な成果であったと考える。

研究成果の概要（英文）：The research project explored St. Stephen's Cathedral in Vienna, the late gothic mausoleum, and Habsburg Emperor Frederick III's tomb that was placed in the Cathedral by Emperor Maximilian I in the early sixteenth century. For this purpose, the surveys on the tombs and mausoleums were carried out in Austria, Germany, Spain and France. It was also helpful to consider some gothic or renaissance examples of altarpieces (sculptures) and manuscripts (especially prayer books). Based on these surveys results, iconography and form of tombs and mausoleums were analyzed. Finally, their functions and roles were clarified.

研究分野：ゴシック美術

キーワード：ハプスブルク　墓　葬礼　聖堂　彫刻　建築　中世　近世

１．研究開始当初の背景

ウィーンのシュテファン大聖堂は、およそ二世紀にもわたる長い造営期間中に様々な変更が加えられ続け、ようやく 15 世紀後半に完成したゴシック建築である。とりわけ 14 世紀中葉、大公ルードルフ四世（1339‐1365）によって大規模な増改築に着手され、また同時に、ルードルフ四世自身と妻カタリーナの墓碑が設置されることにより、ハプスブルク家の霊廟としての役割も担うようになった点は重要である。その後の紆余曲折を経て、15 世紀後半、皇帝フリードリヒ三世（1415‐1493）の時代、シュテファン大聖堂はほぼ完成に至る。16 世紀初頭にはフリードリヒ三世の墓碑がようやく完成し、息子である皇帝マクシミリアン一世（1459‐1519）によって本大聖堂内陣に設置された。

フリードリヒ三世の墓碑をシュテファン大聖堂内陣に設置するという処置が、果たしてフリードリヒ三世本人の当初からの意向であったのか、もしくはマクシミリアン一世による変更の結果であったのかは、定かではない。したがってフリードリヒ三世墓碑が制作された本来の目的、あるいは変更の経緯は、本大聖堂の造営最終段階における皇帝の意図を解明する上で、重要な鍵となりうであろう。換言すれば、本大聖堂の造営目的および図像的位置付けを明らかにする上でも、フリードリヒ三世墓碑の制作から設置に至るまでの経緯は、解明されるべき問題だといえるのである。

２．研究の目的

本研究は、ウィーンのシュテファン大聖堂に設置されたハプスブルク家の皇帝フリードリヒ三世の墓碑について、その造形や図像の分析を通じ、墓碑と霊廟の関係性、および、それらが有した機能や役割に関する再解釈を試みるものである。

フリードリヒ三世の墓碑は、1467 年頃より彫刻家ニコラウス･ゲルハールト･フォン･ライデン（ca. 1420/30 ‐ 1473）によって着手された。その後、初代彫刻家ゲルハールトが歿して約 40 年後となる 1510 年頃、本作はようやく完成した。そうして 1513 年、ウィーンのシュテファン大聖堂に設置され、現在に至る。およそ半世紀という長期に及んだ制作経緯の詳細は杳として知られておらず、原案で予定されていた設置場所に関してすら研究者間で見解の一致を見ていない。

フリードリヒ三世墓碑は、全体のサイズが 619 x 458 cm、棺蓋だけでも長辺が 3 メートルにおよぶ。その表面はゴシック建築を模した小柱やアーケード、壁龕などで彩られ、さらに聖人や聖職者など総計 200 点の人像彫刻が施されるなど、その規模と造形において特異な作品となっている。

以上の状況を踏まえて本研究では、ゴシック末期からルネサンス初期にかけての墓碑およびその霊廟建築の考察を通じて、フリードリヒ三世墓碑とその最終的な設置場所であるシュテファン大聖堂のコンセプトの解明を目指した。

３．研究の方法

本研究は、ウィーンのシュテファン大聖堂におけるフリードリヒ三世墓碑をはじめ、ハプスブルク家に関連する墓碑の調査を主軸として進めた。具体的な調査対象は、以下に挙げた墓碑および霊廟である。

（1）ウィーンのシュテファン大聖堂、および、そこに設置されたフリードリヒ三世の墓碑と、同大聖堂におけるその他の墓碑の調査：フリードリヒ三世の墓碑は、長辺が約 6 メートル、棺の高さが約 2.4 メートルという大作である。棺上面にはフリードリヒ三世の横臥像が配され、棺側面の上層には紋章盾が並べられる。さらに下層には、各面に総計 8 つの壁龕が設けられ、その周囲はゴシック建築を模した柱で区切られ、総計 200 点ほどの人物像、および、多数の動植物で覆われている。これらの造形や図像、および機能について調査した。

（2）インスブルックの宮廷礼拝堂、および、そこに設置されたマクシミリアン一世の墓碑の調査：フリードリヒ三世の息子マクシミリアン一世の墓碑は、マクシミリアン一世自身の跪拝像を中心として、総計 28 体の等身大超のブロンズ像をはじめ、古代皇帝の胸像、そして聖人の小像から構成される。本研究ではとりわけ、マクシミリアン一世の親族らを表わした等身大超のブロンズ像に注目し、その由来等について調査した。

（3）マクシミリアン一世の娘であるネーデルラント総督マルガレーテ・フォン・エスターライヒ（マルグリット・ドートリッシュ）（1480 – 1530）が建設した霊廟（フランス、ブール＝ガン＝ブレス近郊、ブロウ修道院）とその墓碑群の調査：自分自身と、最後の夫であるサヴォイア公フィリベルト二世、義母マルグリット・ド・ブルボンを埋葬するために、マルガレーテ自らが施主となり建設した修道院と墓碑である。比較的良好な状態で原状が保たれていることから、墓碑と聖堂建築の空間的関係性に着目した調査を行った。

（4）ハプスブルク家に関連する墓碑と霊廟の調査：ハプスブルク家の始祖たるルードルフ一世の墓碑も安置されているザーリア朝の皇帝霊廟シュパイアー大聖堂（ドイツ）、ドイツ後期ゴ

シックに影響力をもったルクセンブルク家の霊廟プラハ大聖堂（チェコ）、皇帝カール五世以下スペイン・ハプスブルク家の霊廟エル・エスコリアル修道院（スペイン）、フリードリヒ三世の妻エレオノーレの両親であるポルトガル王夫妻の墓碑が納められたバターリャ修道院（ポルトガル）などである。これらの調査に際しては、とりわけ霊廟設立経緯に注目し、施主の意図の把握に努めた。

（５）ブルゴーニュ公国に関連する墓碑の調査：クラウス・スリューテルによるフィリップ豪胆公の墓碑など、北方ルネサンスの彫刻に多大な影響を与えたブルゴーニュ公国の墓碑を中心に、これに関連する墓碑を、ディジョン美術館、およびパリのルーヴル美術館等で調査した。とりわけ、ブルッヘの聖母聖堂に安置された、マクシミリアン一世の妻であるブルゴーニュ公マリー・ド・ブルゴーニュの墓碑に注目し、棺の側面を飾る、紋章で構成された家系図等の特徴的な表現を中心に調査した。

こうした調査結果に基づき、写真や墓碑形式、墓主の表象、副次人物像や紋章等の各種モティーフを網羅的に体系立てたデータベースを作成し、図像や造形分析の手掛かりとした。あわせて次項に挙げているとおり、同時代の写本（特に祈禱書）や祭壇彫刻などに関しても調査を行った。

４．研究成果

前項に挙げた作品調査を踏まえ、ゴシック末期からルネサンス初期における彫刻と建築の関係性、および受容方法について検討した。考察に際しては、彫刻・建築の一般的な関係性や受容を検討しつつ、その中で墓碑や霊廟としての図像や機能の解明に尽力した。

まずは周辺的な研究の成果から述べていく。第一に、祈禱書の研究である。ハプスブルク家にも所縁があり、また同時代の美術における中心地のひとつであったヘント・ブルッヘ派によって 1500 年前後に制作された祈禱書について調査を行い、注文主（君主）の表象、および、トロンプルイユとして描写された植物などの表現を中心に分析し、祭壇画等における寄進者像と比較した。また祈禱書としての祈念および典礼に際しての機能や役割について検討した。以上の成果は、2016 年度から 2018 年度にかけて、以下の報告書として執筆・刊行した。《皇帝マクシミリアン一世の旧祈禱書》（Wien, ÖNB, Cod. Vind. 1907）2016 年；《スコットランド王ジェームズ四世の祈禱書》（Wien, ÖNB, Cod. Vind. 1897）2017 年；《ロートシルト祈禱書》（ehm. Wien, ÖNB, Cod. Vind. Ser. n. 2844）2018 年。

第二に、祭壇彫刻の考察である。16 世紀初頭に制作されたドイツの祭壇彫刻に注目し、彫刻と建築、そして典礼等との関係性について考察した。注目したのは「マリアヌム（Marianum）」とよばれる、聖堂の天井から吊り下げる形式の聖母像である。聖母像が浮遊するかに見える設置方法は、像の聖性を示す手段であり、祈禱者と本像の属する領域が異なるということが強調される。換言すれば「マリアヌム」の設置により、それが置かれた内陣を頂点とする聖堂空間のヒエラルキーが提示されることとなるのである。以上の考察は、次の論文として執筆・刊行した。「祈りのイメージとヴィジョン　リーメンシュナイダー作フォルカッハの《ロザリオの聖母》」、2017 年；「ファイト・シュトース作《天使の挨拶》　祈念像としての「ロザリオの聖母」と「受胎告知」」、2016 年

以上の周辺的な研究の成果を踏まえた上で、墓碑や霊廟に特化した考察を進めた。まず霊廟については、建築図像の研究を中心に行った。とりわけ空間がもつ君主ないし支配者とイメージと、その意図的な使用による権威継承の可能性に注目し、その表象方法の解明に努めた。あわせて死者を弔う場である霊廟としての機能を把握すべく、マルガレーテが建設したブロウ修道院の聖堂に注目し、その内部に配された墓碑や祭壇、礼拝堂、ステンドグラスといったプログラムの考察を通じ、施主であるマルガレーテの個人的な要望が反映された霊廟建築である点を指摘した。こうした研究成果の一部は、2016 年のシンポジウムにおける以下の口頭発表にて報告した。『形式の受容／意味の順応　ゴシック期のドイツにおける建築タイプの変容』（2016 年）。

さらに個別の墓碑の図像分析を行った。たとえばフリードリヒ三世墓碑に関しては、とりわけ側面のコーニス上に配された「弔いの小像」に注目した。この「弔いの小像」は、ブルゴーニュなどで観察される、墓主の魂の安寧を祈る哀悼像の系譜に位置づけられるものである。墓主は概して自身の死者ミサなども含む総合的な寄進に意欲的であり、ましてやそれが権力者の場合、霊廟としての聖堂や修道院を建設することもあった。そして死者ミサや追悼において、聖職者と、聖職者に導かれた現実世界の哀悼者は、墓主の魂の安寧のために祈ることが求められた。本墓碑の「弔いの小像」は、独立した跪拝像として現実世界との狭間に棲まうことによって、生者の共感を導く機能を担った。「弔いの小像」は、墓主が築き上げた壮大な葬礼芸術のイメージと、その歿後の現実世界とを結び付ける仲介者である。祈り追悼するという行為を共有することで、生者は「弔いの小像」に導かれ、墓主のイメージに感情移入する。臨場感を追求した劇場型といえる表現にこそ、フリードリヒ三世墓碑における「弔いの小像」の革新性が認められるのである。以上の考察は、「皇帝フリードリヒ三世の墓碑　ゴシック期における哀悼像の系譜と機能」（2018 年）として執筆・刊行した。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計　８件）
①岩谷秋美、「プロテスタント教会建築の機能とかたち　ルター派とカトリックの比較を中心に」、『言語文化』、36、2019、282-302
②岩谷秋美、「眼差しの再構成　ハンス・マカルトによるティツィアーノの受容」、『言語・文学・文化』、124、2019、31-54
③岩谷秋美、「《ロートシルト祈禱書》（ehm. Wien, ÖNB, Cod. Vind. Ser. n. 2844）」、『Aspects of Problems in Western Art History』、16、2018、78-82
④岩谷秋美、「皇帝フリードリヒ三世の墓碑　ゴシック期における哀悼像の系譜と機能」、『研究紀要』、24、2018、267-275
⑤岩谷秋美、「《スコットランド王ジェームズ四世の祈禱書》（Wien, ÖNB, Cod. Vind. 1897）」、『Aspects of Problems in Western Art History』、15、2017、120-124
⑥岩谷秋美、「祈りのイメージとヴィジョン　リーメンシュナイダー作フォルカッハの《ロザリオの聖母》」、『Aspects of Problems in Western Art History』、15、2017、43-49
⑦岩谷秋美、「ファイト・シュトース作《天使の挨拶》　祈念像としての「ロザリオの聖母」と「受胎告知」」、『Aspects of Problems in Western Art History』、14、2016、49-57
⑧岩谷秋美、「《皇帝マクシミリアン一世の旧祈禱書》（Wien, ÖNB, Cod. Vind. 1907）」、『Aspects of Problems in Western Art History』、14、2016、145-148

〔学会発表〕（計　２件）
①岩谷秋美、「プロテスタント教会建築の機能とかたち　ルター派とカトリックの比較を中心に」、明治学院大学芸術学科・明治学院大学言語文化研究所・ドイツ語圏美術史研究連絡網共催シンポジウム「ドイツ美術とプロテスタンティズム」、2018
②岩谷秋美、「形式の受容／意味の順応　ゴシック期のドイツにおける建築タイプの変容」、日本建築学会シンポジウム「西洋建築史研究の新たな地平　受容と順応」、2016

〔図書〕（計　３件）
①柳井浩・岩谷秋美共訳、鹿島出版会、『ゴシックの匠　ウィトルウィウス建築書とルネサンス』、2018、149
②岩谷秋美、中央公論美術出版、『ウィーンのシュテファン大聖堂　ゴシック期におけるハプスブルク家の造営理念』、2017、575
③田辺幹之助、新藤淳、岩谷秋美共著、東京美術、『ドイツ・ルネンサンスの挑戦　デューラーとクラーナハ』、2016

６．研究組織
(1)研究分担者
なし

(2)研究協力者
なし

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。